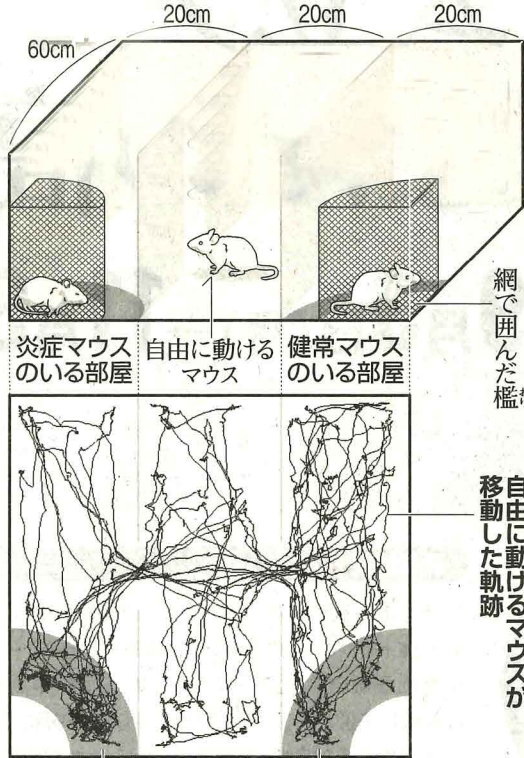


# マウスに「共感」能力

マウスの「共感」を調べる実験と結果



「近寄った」と判定するエリア

判定エリアに滞在した時間	炎症マウス	3分4秒
	健常マウス	2分13秒

## 川崎医療福大など実証

マウスにも苦しむ仲間を気遣い、寄り添う能力があるようだ。川崎医療福祉大などの研究グループが、高度な社会的行動である「共感的な行動」を示すことを明らかにした。「共感」は、人間では脳の病気や障害で損なわれることがある。研究グループは「共感の仕組みを、マウスの実験で追究する手法になりうる」と期待している。

共感とは、他者の感情や心の状態を自分のことのように感じる能力。高度な認知機能であり、マウスでは確認されていなかった。川崎医療福祉大の上野浩

司講師（神経生理学）と川崎大精神科学教室、岡山大精神神経病態学教室の共同研究チームは、マウスが、けがや意識不明という異常状態に陥った仲間マウスに

スに対し、どのように振る舞うかを検証した。縦横60センチの大きなケージを透明な仕切り板で3等分した部屋を用意。仕切り板にはマウスが通り抜けられる穴が開いている。両端の部屋の隅の小さな檻に、異常状態のマウスと健常なマウスをそれぞれ閉じ込め、ケージ全体を自由に歩き回れるマウスが、檻の中を各マウスにどれだけ近寄るかを10分間調べた。その結果、後ろ脚に腫れと痛みを伴う炎症を人工的に起こさせたマウスの部屋には平均4分37秒滞在し、

## 苦しむ仲間へ寄り添う

うち3分4秒間は20センチ以内に近寄っていた。一方、健常マウスの部屋の滞在時間は3分51秒で、近寄ったのは2分13秒とどちらも短く、統計学的に偶然とは言えない差が出た。ただ個体差があり、行動を確かめたマウス11匹のうち3匹は、寄り添う行動を見せなかった。一方、麻酔で意識を失ったマウス、尻尾を洗濯ばさみで挟まれ、痛みと怒りを生じているマウスに対しては、寄り添う行動は見られなかった。

上野さんは「痛がっている仲間を見ると、危険を感じ、避けるかと思っていたが、逆の結果になった。仲間の苦しみを感知して近づくと『共感様行動』をマウスで実験出来るようになれば、共感をつかさどる神経回路の解明や、共感を失った脳の病気の治療法の開発につながるでしょう」と話す。

成果は米科学誌「ブレイン・アンド・ビヘイビア」に掲載された。

(中村通子)